▲映画宣伝ポスター。このポスターは縦長の小さいサイズ。主に宣伝初期のＰＲ用として配布されるもの。制作・脚本と並び原作者辻さんの名前も入っている。
（市鷹巣図書館所蔵）

▲歌にもなった「林檎の花咲く町」のレコードジャケット。映画の主題歌にもなり、大ヒットした。歌手の高石かつ枝はこの歌で昭和38年の紅白歌合戦に出場している。

辻さんの青春時代を描く「林檎の花咲く町」

辻さんの作品の中で、燦然と輝いているのが初期の作品「林檎の花咲く町」です。昭和36年に家の光協会新人懸賞長編小説に千数百点の中から入選、雑誌「家の光」に連載されるとともに映画化が決まり、また同名の映画主題歌は当時の人気歌手高石かつ枝でレコード化され、全国で愛唱されました。

原作は、東北の農林高校の町を舞台に、東京の音楽大学を卒業した美しい音楽教師相馬桂子が、1年間の学園生活を通し、生徒たちとの葛藤や心の交流を描く青春小説。

高校の実名は登場しませんが、辻さんの過ごした鷹巣農林高校や同時代のまちのようすが活き活きと描かれ、学校田や演習林での実習風景、きみまち坂や十和田湖への小旅行、東京への修学旅行、学校祭、綴子大太鼓や根子番楽が登場する夏祭り、陣場岱の湖（今の鷹巣中央公園）でのスケート、冬の伝統行事などのエピソードが挿入されており、当時のようすが、季節感豊かに表現されています。

主人公は、鷹巣の旧家「相馬家」に実在した女性がモデルといわれ、さらに「養女」の設定は辻さんの境遇が重ね合わされているともいわれています。

東宝映画となった「林檎の花咲く町」

この小説を原作とした映画は昭和38年に製作され、同年全国公開、鷹巣や米内沢でも上映されました。今年9月1日、後輩たちにより42年ぶりに再上映されましたので、ご覧になった方も多くいらっしゃると思います。

映画の監督はその後加山雄三の若大将シリーズでメガホンを取ることになる新鋭岩内克己監督。白川由美が主演の新任女性教師役をつとめ、当時新人だった峰岸徹、長谷川明男、中堅俳優の中丸忠雄、藤木悠、西村晃などが出演しています。映画主題歌を歌ったコロムビア・レコードの高石かつ枝が初めて映画に出演したことも話題になりました。

スタッフには黒澤映画のカメラマンとしても有名な中井朝一（撮影）、石井歓（音楽）などが参加、撮影は予算の関係から長野県中野市で行われました。

映画のストーリは主人公の設定や登場人物の名前などは一部同じですが、「青い山脈（49年東宝）」を代表とする明るい「東宝カラー」が全面に打ち出され、高度経済成長期の世相に合わせた学園ものになっています。

そのため文芸部や演劇部の設定はラグビー部やバレー部などの運動部に変わり、田植え風景や山仕事のようすなど、原作で表現されている地方色は映画では抑えられています。

映画が原作とは異なることを覚悟しながらも、試写会を見た辻さんは、「ところが映画を見て安心しました。最初の出だしから新鮮で、明るくって、楽しくって、現代の高校生活を身近に感じさせてくれる健康な映画に私の抱いていた杞憂（＝心配ごと）はあとかたもなく吹き飛んでしまったのです。今さらのように秋田の農林高校が懐かしく思い出されます。」（東宝映画のＰＲ誌より）と述べています。

しかし、映画のロケが山の稜線がやさしい秋田ではなく、険しい山岳地帯の長野で行われたことをかなり残念に思っていたことを同級生の皆さんに語っていたそうです。

映画監督・岩内克己氏からのメッセージ

今年9月、この映画の監督をされた岩内克己氏にお会いし、当時の撮影のようすなど伺うことができました。岩内氏は大正14年生まれの80歳、東宝で多くの作品を監督され、特に加山雄三の「若大将シリーズ」は有名です。

監督は、映画の上映会を企画した鷹巣農林高校をはじめ現代の高校生に、「当時の若者にはエネルギーがあったと思う。目標の達成のためには思っているだけじゃだめで、手立てを尽くしてほしい。5年、10年と続けているうちに必ず実現できる」とのメッセージをいただきました。

なお、岩内氏からは当時の映画の資料もたくさんご提供いただきましたので、後日、別の機会でご紹介します。

「林檎の花咲く町」を監督された岩内克己氏からご提供いただいた映画のスチール写真の一部をご紹介します。撮影は、屋外でのロケが長野県中野市、屋内のシーンは東京の東宝撮影所で行われました。
（撮影：田中一清氏）

▲映画のイメージとなる林檎園でのシーン。鷹巣農林高校の実習農場のりんご園がモデルとされている。

▲映画は、就職組と進学組の葛藤も大きなテーマとなっている。進学率はまだそれほど高くない時代だった。

▲ロケに登場する校舎は、農林高校の雰囲気を出すため、周囲に樹木の多い高校が選ばれた。

▲卒業式で。左は、歌手でもあった高石かつ枝。辻さんの原作の出版記念会では花束の贈呈も行った。

◀受験や新任地への転勤で東京へ向う別れのシーン。都会志向の当時の世相の中で「ふるさとにも大切なものがたくさんある」ことが描かれている。

演技指導中の岩内監督（63年）

映画監督
岩内克己（いわうち　かつき）

1925年ジャカルタ市生まれ。明治大学工科を経て鎌倉アカデミア演劇科卒。53年東宝入社。63年「六本木の夜愛して愛して」で初監督。「林檎の花咲く町（63年）」は二本目の作品。代表作に「恐怖の時間（64年）」「エレキの若大将（65年）」（若大将シリーズ7本）「パンチ野郎（67年）」「砂の香り（68年）」「グアム島珍道中（73年）」など。テレビドラマも多数。助監督時代は大島渚、吉田喜重らとともに、ヌーベルバーグ研究会にも所属。退職後は東京工学院で講師を勤め後進の育成にあたる。

現在の岩内監督（渋谷で）